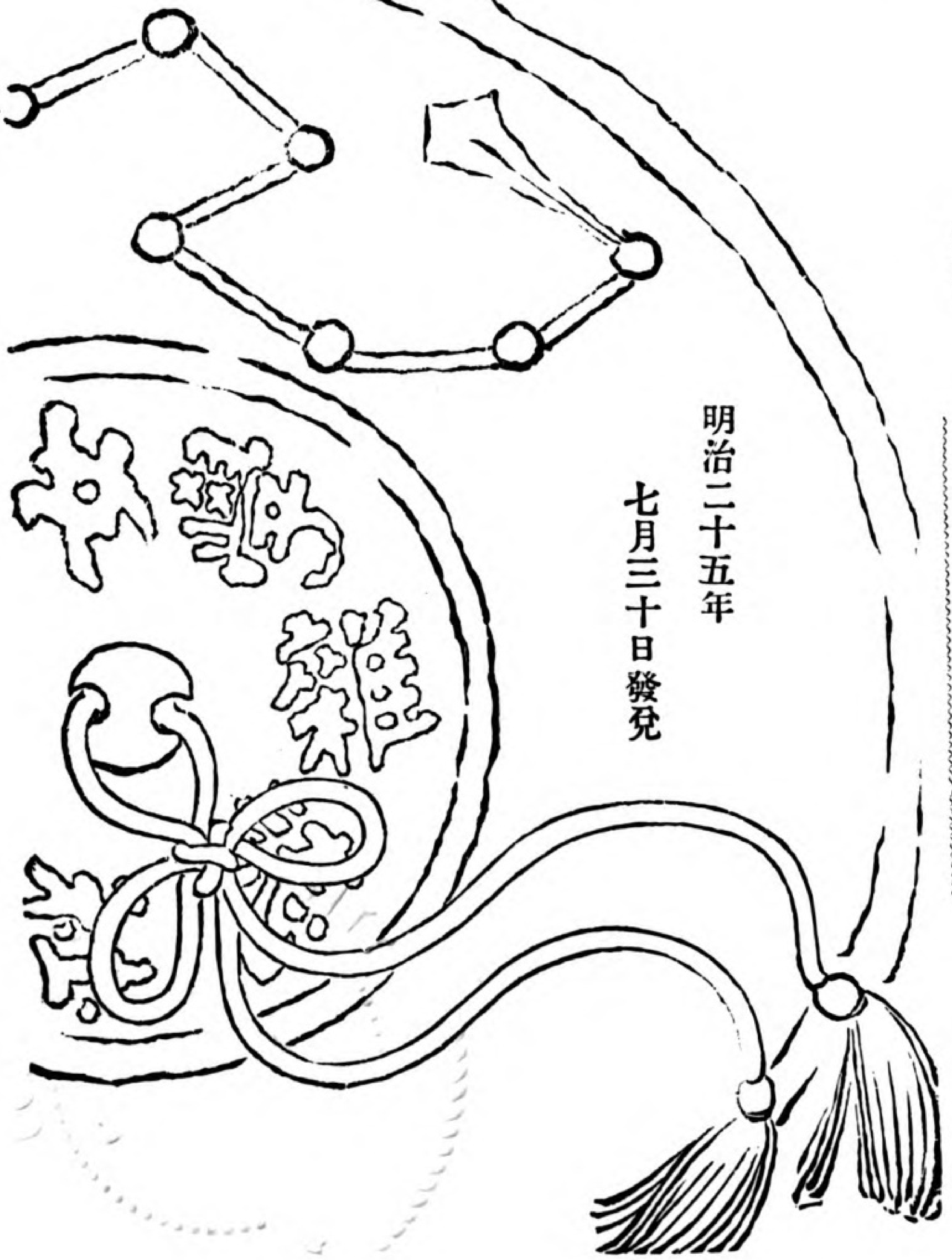
July 1892
no. 324-1

女學雜誌

第三百二拾四號

甲の巻



明治二十五年七月三十日發兌

注意

●社説　天地之人
●論説　徳川時代の平民的理想（透谷子）
●史傳　裏面の楠公（天知子）
●文藝　其角雜吟三十七句
●雜錄　澤庵禪師を觀る（天知子）○天地管見（六合學人）
●小説　夏草（一回）無名氏譯
●批評　まぼろし（透谷子）○千代田城大奥○日本大辭書○月露○活ける基督と四福音○安心立命婦人教育雜誌
●片々

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 324. JULY 30th. 1892.

EDITORIAL :—The Universal Man.

LEADING ARTICLE:—Democratical Ieals under the Tokugawa Reign (III).

BIOGRAPHY :—The inner side of Nankō.

LITERARY :—The Miscellaneous Poems of "Kikaku."

MISCELLANEOUS :—The Priest "Takuan, (Tenchishi) ; Bird-eye View of the Cosmos (VI.).

NOVEL :—"Natsugusa" (Translation, 1,) (Mumeishi).

CRITICAL NOTES ;—The Vision (Tōkokushi) Women's Educational Magazine. The Living Christ and the four Gospels, &c.

CONCERNING WOMEN.

本號(第三百廿四號)目次

●社說 天地之人

●論說 德川時代の平民的理想(透谷子)

●史傳 裏面の楠公(天知子)

●文藝 其角雜吟三十七句

●雜錄 澤庵禪師を觀る(天知子)○天地管見(六合學人)

●小說 夏草(一回)無名氏譯

●批評 まぼろし(透谷子)○千代田城大奥○日本大辭書○月露○活ける基督と四福音○安心立命○婦人教育雜誌

●片々

前週(第三百廿三號)赤表

●社說 南窻一筆(避暑の精粹。何人か出べき。夏休中の女學生)

●文藝 源氏明石の一段

●家政 衛生金玉(消化器の事。皮膚の事。齒、目、及び髮の事)○家政クラブの經歷(アバーデン女史)○アイスクリーム

●史傳 セキスピアが母○二條院讃岐の事

●雜錄 暑を避くる經驗(山下石翁)○螢狩(田邊花圃)○事物紀元○明治女學校卒業式の觀迎及び勸告○女子と愛國心

●女報

前々週(第三百廿三號)白表

●社說 裝美魔(美術的功利論。器械的美術論。美の本領)

●論說 德川時代における平民的理想(其二)透谷子。○新博士猪子吉人君(天知子)

●小說 乙女(は、あ)

●文藝 隨園詩話の數節(無名氏譯)

●批評 脫蟬子に與へて其「星夜」を評す(星夜の主人公となりし男)○脫蟬子の答○又の答(星夜の主公人ならざりし男)

●時事 後藤伯邸后の貧家

●附錄 教育學

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌　第三百廿四號　明治二十五年七月三十日發兌

社説

天地之人

今の内閣は、稍や超然策を棄てたり。内閣が超然たるとを廢するは祝すべし、人に於ては、超然の德を忘却すべからず。吾黨は太たく此の二文字を愛す。

人は物外に立ち、超然として安んずる所ろなかる可らず。人は細胞の集合躰なりと云ふは、人を物の中に投入するなり。人は神經系の遞信省なりと云ふは、人を物の中に埋沒するなり。人は包圍事情の產みたる子なりと云ふは、人を物に依て創造せられたりとするなり。人もし、物の中に全沒せば、人は即はち物なり、物は即はち人なり、物以外に人あるを見ず物亡ぶれば即はち人も亦亡びん、朽ち果つべき物失すれば則はち人も亦失せん、故に人を稱して万物の靈と云ふこと能はず。

人は物にあらず、物の外に人あり、喩えば土沙の外に清泉の存するが如し、假りに之を浸合するとを得と雖ども、之を混一にすると能はず。人は物にあらず、故に物外に超然たるは其の自然なり。

但だ、人の斯の世に立つ、其の靈を、物を通して動作せしむ。故に、其の發現する所ろを察すれば、人は悉とく物なり。言は口より出で、情は心より發し、愛は涙より漏れ、怒は血より激す。こゝを以て、人その形を見、形を指して是れ人の動作なりとし、動作を集合して是れ人なりと云ふ。然れども、人の動作は、妙奧不可思議の幽源より發し、暗電の爍めくが如く、獸雷の轟ろくが如く、天風の太虛を拂ふが如く、何處より來り、何處に行くを示さず、忽然、幻然として、躰肢の或部分に感通し、即はち初めて肉物をして靈動せしむるなり。肉物は自から動かざると土人形の如し、力外より之に加はりて則はち活動す、人の動作亦斯の如し、察する人、土人形を指ざして、是れ人なりと云ふ可らず。

左れば、人は元と物外に立つべきものならずや、而して尙ほ物内に埋沒し去るは何の故ぞ。他なし、假寓を眞宅とし、ヲ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○○○ ○○○フヒスをホームとするに因る。人は其有形の肉に現わるるの外、屢ば現われざるの地に潜まずんばある可らず。悲しひ哉、人、その全身を肉の面てに發表して、内に、之を衛る所ろあらず。斷えず、ヲフヒスに勞働して、ホームに歸臥するの味を知らず、假りの宿を一生の家として、他に眞の安宅あることを辨まへず、役々として物界に生死し、息氣絶えて、骨と共に減ぜんとはなす。悲しひ哉。

人は風雷の如く猛からず、山の如く大きやかならず、川の如く長からず、月の如く千古の命を保つことなしと言ふものあらん。眇乎たる五尺の躰を以て、空漠々の下、厚連々の上に立つ。少こしく節を失すれば直ちに病み、病みて少しく苦しければ多くは死す、其もろきこと流の葦に似たり。佛國の哲人曰く、人は只だ流の葦なり、天地間に居て尤とも脆ろきものなり、左れど此の葦に思慮あり、思慮ある葦は之を碎く所ろの流よりも尊ときなり、天地もし人を殺すとも、天地は之を知らず、人は之を痛む、人は則はち天地よりも尊ときなり、と。人の弱きは、何ものよりも強し、物は自から其の強きを知らず、人は強きを知るが故に、自から弱しとす、而して強きを知るは、強くなることの初め也。人は万物よりも尊とし、万物の上に立つべし、万物以外に超然として浮むべし。

人この尊位を辨まへず、自から卑くゝして、物界に跼蹐す、あゝ何んぞ其の自棄することの太甚しきや。世上の法論者、切りに權利を說く、然れども、此の最大最高の權利を棄つることを顧みざるものゝ多きは何故ぞ。自から肱を曲げて物の爲に縛せられんとし、而して當人爭奪の小政治界に細々たる自由を守張す憫笑すべし。

故に吾黨は深く安息日の制度を妙とす。安息とは、世の事務を棄て、靈の家に歸るの義あり。人の社會に立ちて勵勞するや、個々專門を定む、或は政治家と云ふ、或は軍人と云ふ、或は百姓と云ふ、而して、家に於ても、或は父と云ふ、或は子と云ふ、或は主人、下郎、下女と云ふ。然れども、斯の如き名目は、人が社會と云へる舞臺に立ち、暫らくの間の演劇を爲すに付、夫々の役を定めたるに異ならず。彼は初めより百姓として生れざりき、生れたるは人間としてなりき。彼は初より、下女、下郎として生れざりき、生れたるは一個の人としてなりき。左れば、名は役名に過ぎず、專門は分役に過

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ぎず、仕事は人の靈能の發現に過ぎず。人の人たるは即はち皆同じ、而して人は常に其の人たる所ろを忘る可からざるなり、形容詞を主として、名詞を忘れ、仕事の人たることを思ふて、人の仕事たることを忘る。世の迷想、人の爭意、德の退歩、多くは之より發す。

この通弊を醫するの良法は、安息にあり。六日、其專門に働らき、一日其人に歸る、人に歸る時は、王侯相將なし、士百姓なし、官員なし、たゞ人として宇宙六合の中に立ち、超然として思想す。あゝ、何等の快樂ぞ。

安息の制度は人の信德に欠くべからず、故は、古來、聖賢は常に之を以て敎ゆ。希臘の哲人は之が爲に奴隷を置きて士人の爲に余暇を造らんとし、支那の聖人は之が爲に朝暮三省の戒を制し、天竺の大覺は菩提樹の下に靜思禪定の工夫を遺し、新約の救主は尤とも强く七日一休の制度を重んじたり。

されど、時々、安息の日を置くは、止みがたきが故なり。人は常に安息の思想を以ち、而して常に活潑々の勞働を爲すを最上とす。其心は全人の心なり、其行は人の專門の一職なり。其心は天地八荒に瀰滿す、其手は一枝半屑の物に拘つらふ。其心は超然として山僧の如し、其手は敏活にして市人の如し。人はこゝに至りて初めて完きに近し。

余は、日本人にして東京に住ふとせん、されど、余は元と人なり。人、この天地間に發現し、則はち日本に歩をとゞめ、東京に家を構ふ。余一身は天地の内に滿ち、尙ほ天地の外に透る、何をもてか、日本及び東京の内に全沒せんや、况んや區々、別々として、余が專門となす所ろの業務の上に於てをや。余は、先づ人なり、この人、日本に立ち、府下に住ひ、文筆に從事す。文筆の人、東京の人、日本の人たるのみにはあらざる也。

この言を聞きて、所云る國家論者は慷慨することもあらん。吾黨は、かの流が局促として一小部分に沒入するを惜しむ。須らく頭を擧げ、山の大ひなると、月の高きと、浮雲の轉ずるに快よきとを見よ。

天地の人。言語の制裁によりて之より以上の廣味を現はすは面白からず。こゝに天地の人と云はん。人よ、乞ふ、其の身の天地の人たることを覺れ。今や、紅塵の都下を去りて、山水淸地に入り、其常職を離れて、悠々自適する人もあらん、こ

れ實に、天地之人たるの味ひを自覺發明するの機なり。

論説

徳川時代平民的理想

透谷子

徳川氏の時代に於て其遊戯其會話其趣味を探らんもの文士の著作に如くはなし。而して文士の著作を翫味するもの武士と平民との間に凡ての現象を通じて顯著なる相違あることを研究せざる可からず。琴の音を知り琵琶の調を知るものは之を三絃の調に比較せよ、一方はいかに莊重にいかに高韻なるに引きかへて他はいかに輕韻卑調あるに注意するなるべし、斯の如きは武士と平民との趣味の相違なり。謠曲を聽きたる人は淨瑠理を聽かん時にこの兩者に相容れざる特性ある事に注意するならむ。かくの如く、其能樂に於て河原演劇に於て、又は其遊藝に於て、もしくは其會話の語調に於て極めて明晰なる區別あることを知らむ。

蓋し我邦は極めて完成せる族制々度を今日まで持ち續けたるものなるからに吾人の思想も亦た自から單純なりし事は爭ふ可からざる事實なり。而して其單純なる思想は階級に應じて武士は武士の思想を續ぎ、平民は平民の思想を受けて甲乙相共に異色をもつて生長し來りぬ。今日の我が語學に志ざすところのものが我が言語に甚だしき階級語に富めるとを言ふも元より此原因あるによればなり。ヲノリフヒック(敬禮語)に富めるも亦たこの族制々度の完熟せるに因れること多し、是れ我國言語の特色にして、この特色は以て我邦に於ける貴族(徳川時代にありては武士をも含む)平民の區界を判するに足るべし。

貴族平民の兩階級は徳川氏の時代に入りし時大に亂れたり、徳川氏は三河武士を以て天下を制したるものなれば從來の階級は概ね壞裂したり、加るに長年の亂世に人民の位地も大に前とは異なりて從來貴族たりし者の落ちて平民の籍に投ぜし者の從來平民たりし者の登りて貴族の位地を占めし者少數にてはあらざりしならむ。斯して徳川氏初代の平民は從前の平民よりは多少の活氣を帶びたりし事疑ひなし。故に彼等の思想も自から一種の特色を具備し得て陰然武門の思想と對峙せんとするが如き傾きを生じたり。宜なるかな。我邦に於て始めて平民社界の胸奥より自然的育生の聲をこの時代に於て

聞きたるや。

人は元祿文學を卑下して日本文學の恥辱是より甚しきはなしと言ふもの多し。われも亦た元祿文學に對して常に遺憾を抱くものなれど、彼をもつて始めて我邦に擧げられたる平民の聲なりと觀ずる時に余は無量の悅喜をもつて彼等に對するの情あり。然り俳諧の尤も熟したるもこの時代にて、戯曲の行はれしも、戯作の出でしも實に此時代にして而して彼等の物皆な平民社會の心骨より出でたるものなることを知らば余は寧ろ我邦の如き貴族的制度の國に於て平民社會の初聲として彼等を厚遇するの至當なるを認むるなり。

我國平民の歷史は始めより終りまで極めて悽惻暗淡たる現象を錄せり。而して德川氏以前にありては彼等の思想として世に存するもの甚だ微々たり、德川氏以後世運の漸く熟し來りたるを以て爰に漸く多數の預言者を得て孚化したる彼等の思想は漸く一種の趣味を發育し來れり。然れども彼等の境遇は功名心も冒險心も想像も希望も或る線までは許されて其線を越ゆることは叶はず、何事にも遮斷せらるゝ武權の塀墻ありて彼等は聲こそは擧げたれ憫れむべき卑調の趣味に甘んぜざるを得ざりしは亦た是非もなき事共なり。

幕府は學藝の士を網羅するに由斷なかりき。幕府のみ然るにあらず、その高等種族(武士)は文藝を容れて大に品性を發揚したり、當時非凡なる學士の彼等の社界に厚遇せられたる事實は少しく德川時代を知るものゝ共に認むるところなり。然るに是等學藝の士は平民に對して些の同情ありしにあらず、平民の爲に吟哦せし事あるものにあらず、平民の爲に嚮導せし事あるものにあらず、かるが故に既に初聲を擧ぐるの時機に達したる平民の思想は別に大に俳道に於て其氣焰を吐けり。幕府は盛に能樂と謠曲とを奮興して代々の世主厚く能樂の大夫を遇し而して諸藩の君主も彼等を養ひて武門の士の能く謠曲を謳ふと能はざるは恥辱の如き隆運に向へり。學藝に習れず奧妙なる宗教に養はれざる平民の趣味には謠曲は到底應ずることを得ざるなり。故に彼等の中に自から新戯曲の發生熟爛するありて巢林子の時代に於て其盛運を極めたり。物語の類例へば大平記平家物語等は高等民種の中に歡迎せられたりと雖平民社界に迎へらるべき樣なし、かるが故に彼等の內には自ら彼等の思想に相應なる物語小說の類生れ出でたり、

加ふるに三絃の發明ありてより凡ての趣味の調ふに於て大に平民社界を翼け種々の俗曲なるもの發達し來れり。斯くの如く諸般の差別より觀察し來れば平民は實に徳川氏の時代に於て大に其思想を煥發したるものにして族制的大隔離の餘を受けて或意味に於ては高等民種に對して競爭の傾きを成し來れるなり。

まことや平民と雖もとより劣等の種類なるにあらず、社界の大傾向なる共和的思想は斯かる抑壓の間にも自然に發達し來りて彼等の思想には高等民種に結抗すべきものはなくとも自から不羈磊落なる調子を具有し、一轉しては虚無的の放縦なるものとなりて以て暗に武門の威權を嘲笑せり。故に彼等は自然に政權を輕視して、幕府の紀律に繋がれざる豪放の素性を養ひ、社界全躰より視る時は一種の破壞的原素を其中に發生せしめて大に幕府を苦しめたり。制禁に遭ひたる戯作の類遠島に處せられたる書家の事是が現象の一として擧ぐるに足るべし。漸く閭巷の侠客なるもの起り來りて幕政を輕侮し平民社界の保護者となり。壓抑者に對する破壞的手腕(天知子の語を借用す)となりたるも是が一現象なりけり。

自然の傾向は人力の爭ふこと能はざるものなり、從來文學なるものは獨り高等民種の境内に止まりて平民は一切思想上の自由を持たざりし如くなりしものが纔かに元祿以降の盛運に際會して其思想界に多數の預言者を生みて自から一貫の理想を形くりたれば、其理想する紳士も其理想する美人も其理想する英雄も有り〳〵と文學上に映現し出でたり。

こゝに注意を逃がすべからざる一大現象は遊廓なるもゝの大にこの時代に榮へたることなり、難波或は西京には古るくよりこの組織ありしと雖江戸にてこの現象の大にあらはれたるは慶長の頃かとぞ聞く(慶長見聞記に據る)。蓋し亂世の後人心漸く泰平の娯樂を愬へ、彼の芒々たる葦原(今日の吉原)に歌舞妓見世物等各種の遊觀の供給起り、これに次いで遊女の歴史に一大進歩を成し高廈巨屋甍を弁べて此の葦原に築かれ、都には月花共に此里にあらねばならぬ樣になれり。凡そ女性の及ぼす勢力はいつの時代にも侮るべからざるものなり、別して所謂紳士風なる者を形成するには偉大なる勢力ある事疑べからず。故に平民の中にありし紳士の理想はこの遊廓の勢力によりて輕からぬ變化を經たり、讀者もし難波

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

及び京都に出でし著作に就きて彼等の紳士なるものを尋ね見ば思ひ半ばに過ぐることあらむ。必らずしも巢林子以下の諸輩を引照するに及ばざるべし。遊廓は一個の別天地にして其特有の粹美をもつて其境內に特種の理想を發達し來れり、而して凡惱の衆生が歸依するに躊躇せざるはこの別天地內の理想にして、一度脚を此境に投じたるものは必らずこの特種の忌はしき理想の奴隷となるなり。斯の理想は世上に滿布したり、この理想は平民社界に廣がれり、むしろ高等民種の過半をも呑みたり、或時は通と言ひ或時は粹といふもの此理想に外ならざるなり。而して此理想なるものは即ち平民社界の紳士を作りし潜勢力にして平民紳士の服裝擧動會話趣味この理想に基づかざる事甚だ尠なり。

眼を轉じて巢林子に次ぎて起れる戯曲界の相續者を見れば題目として取るところ平民社會の或一種の驕求を充たすものあるを見るべし。之を聞く、河原乞兒の尤も幼稚なりし時に其好趣は戰國的の勇壯なるローマンス風のものにて、例せば盜賊を取りて主人公となし、之れに慈憐の志を深うせしめ、强を捍しぎ弱を助くる義氣に富ましめ、以て戰國に遠からぬ時代の人心に愬へたる如き概して言へば不自然と過激とはこの時代の演劇に缺く可からざる要素なりしとぞ。後に發達したる戯曲(巢林子以後の)に到りてもこの不自然と過激とは拔くべからざる特性となりて菅原手習傳授鑑に於て、蝶花形に於て其他幾多の戯曲に於て八九歲の少童が割腹したり孝死するなどの事戯曲に特有なるエンサシアズムにてはあるまじき程の過激に流れたり。こゝに一言すべきは、平民に特種の思想生じたりとはいへど、思想は時代の見にてある事勿論なれば、彼等の思想も自ら封建的武勇、別して忠孝の大道を武士の影より掬養し得たりし事を思はざるべからず。故に彼等の中に起りし預言者も一は彼等の趣味に投じ、一は己れの所見に從ひて自から忠孝即ち武士の理想をもつて平民に及ぼす事なき能はず、これ即ち封建制度に普通なる現象にてあるなり。倘ほ言を換へて曰へば封建制度は獨り武士にのみ其精華なるシバルリーを備へたるにあらず、平民も亦た之を摸擬せり、然り平民の內にもシバルリーは具はりたり、少なくとも俠勇の理想彼等の中に浸潤して武士の間に降りし雨は平民までをも濕ほしたることを疑ふべからざるの事實とす。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

かく說き來らば平民社界には「粹」といふもの丶外に强大なる活氣。むしろ理想の俠勇と號するものあることを知らむ。而して我德川時代に於ける平民の位地を觀察すること前陳の如くなりとせば、彼等は其「粹」をも、其「俠」をも偏固なる、矮少なる、むしろ卑下なる理想となしたることも亦明らかならむ。

英國のチョーサーは同國に於て始めてシバルリイの光芒を放ちたる詩人なり、然して其吟詠に上りたるシバルリイは武門の內にあるシバルリイにして平民の內に其筆鋒を向けざりし、蓋し彼の歷史は我歷史にあらず、彼の貴族は我の貴族の如くに平民と離れたるにあらず、彼の平民は我平民の如くに貴族に遠きものにあらず、加ふるに彼には平民と貴族とを繫げる宗敎の威靈ありて敎堂に集まる時に貴族平民の區劃を無みしたり、而して我にはこの大勢力あらず、宗敎にも自からなる階級ありて印度の古時をうつし出しければ、これも我が平民を貴族より遠ざくるの助けをなせし事明らかなり。彼シバルリイは朝廷との關係淺からずして其華奢麗澤も自からに王氣を含みなり而して我平民社界には之に反して政權に抗し威武に敵する氣稟あるシバルリイを成せり。彼のシバルリイには戀愛の價値高められて、俠は愛と其轍を雙べつ丶自から優美高讃なる趣致を呈せり、我が平民社界に起りしシバルリイは其ゼントルマンシップに於て旣に女姓を遊戲的玩弄物になし了りたれば戀愛なるもの甚だ價直なく、女姓のレデイシップをゼントルマンシップの裡面に涵養するかはりに却つて女姓をして男姓の爲すところを學ばしめて、一種の女俠なるものを重んずるに至れり、この點に於て我がシバルリイは彼のシバルリイの如く重味あると能はず、我が紳士風は彼の紳士風の如く優美の氣韻を稟くると能はず、女姓の天眞を殺して自らの天眞をも自損せり。彼のシバルリイは「我」を重んじて輕々しく死し輕々しく生きず、我がシバルリイは生命を先づ獻じて然る後にシバルリイを成さんとするもの丶如かりし、己れの品性は磨ぐこと多からずして他の儀式禮法多き武門に對敵して反動的に放縱素朴に走りたり。宗敎及び道德は彼のシバルリイに缺くべからざる要素なりしに我が平民のシバルリイは寧ろ當時の道德組織を斥ぞけ宗敎には緣薄きものにてありし要するにチョーサーのシバルリイは(即ち英國の)我がシバルリイの如く暗憺たる時代に產れたるにあらず、我がシバ

ルリイの如く壓抑の反動として兇暴に對する非常的手腕として發したるものにはあらで燦然たる光輝を放ち英國今日の氣風英國今日の紳士紳女を彼の如くになしたるも實にこのシバルリイの餘光にてありしとを知るべし。

侠といふ文字英語にては甚だ譯し難かるべし、譯し難き程に我が歷史上の侠は歐洲諸國のシバルリイとは異なれるところあるなり。倘し強いてシバルリイを我が平民界の理想に應用せんとせば侠と粹（侠客の戀愛に限りて）とを合せ含ましめざる可からず、侠客の妻を取りて研究せば得るところあらむ。

我が平民界の侠客をうつして文章に錄せしもの甚だ多し、われは一々之を參照する能はず、こゝに馬琴が其侠客傳に序して曰し數句を擧げて其意見を窺ひ見む。曰く「近世有大鳥居逸平關東小六幡隨長兵衞、皆是閭巷侠 而 其 所 爲 或 未必合於義啻立氣齊爲威福結私交以立僵於世者也、較諸古者道德之士不動聲色消宇內之大變者、相去非唯宵壤而已、然氣豪、以此至捍當世之兇累、此戰國餘習未改其私義廉潔以有然也、使當時無此人則士風自是衰 侠 客 之 義 曷 可 少 哉。……余有感焉而無所激憤不激不憤猶且傳侠客。云々。

支那の大歷史家同じく遊侠傳なる一小篇をのこして曰へることあり。今者游侠其行雖不軌於正義然其言必信其行必果已諾必誠不愛其軀赴士之阨困既已存亡死生矣而不矜其能羞伐其德蓋亦有足多者焉。

韓非子の侠を論ずるの語に曰く、儒以文亂法侠以武犯禁。老子は侠を談じて大道廢有仁義仁義者道之異稱也而有似而非者と曰ふに對して、馬琴は夫侠之爲言僵也持也輕生高氣排難解孔子所謂殺身成仁者是也と言へり。

われは侠を上下する論を立つるにあらず、天知子及び愛山生の所論に對して余はむしろ平民界の侠氣に同情を投ぐるの念起りたれば聊か匆卒の說を爲し我が平民界の「侠」及び「粹」の由つて來るところを穿鑿したるに過ぎず。若し夫れ侠なるものを愛好するやと問はるゝ人あらば我は是を愛好するなりと答ふるに躊躇せざるべし然れども我に侠を重んずるやと問ふものあらば我は答ふるところを知らず、われは實に德川時代に平民の理想となりて異色の光彩を放ちしこの「侠」を其時代の平民の爲に憐れむなり。かつて幡隨院長兵衞の劇を見たる

時にわれは實に長兵衛の衷情を悲しめり、然れども我は長兵衛の爲に悲しむより寧ろ當時の平民の爲に悲しみしなり。彼等平民は自ら重んずる故を知らず、自から俠客なるものをして擅横縱暴の徒とならしめたり、俠客の俠客たる所以甚だ重しとせず、平民界に入て一種の理想となりたる跡眞に痛べし。

史傳

裏面の楠公

天知子

昨夏湊川社内に杖を曳き、墓標靜かなる下に古苔の巨人を見たり、而して今夏楠公の軍學を閲し、文字古びたる所に此巨人を讀むを得たり、然れども余が是れを讀み得しものは少しく其趣きを異にせり彼の八人力の腕を以て彼の不世出の妙策を以て、轍鮒の王朝を甦へして屢々驕賊の膽を奪ひ、生ては尊氏を戰慄せしめ死しては尊氏を泣かしめ、七生人間に生れて賊を滅さんと憤叫し、却て直義をして「愚君に結縁せられしとの惜しさよ」と、敵涙を絞らしたる一巨人。明の舜水をして忠孝天下に著れ月日天に麗かなりと賛せしめ、後世の烈士をして嗚呼忠臣よと嘆惜せしめ、古今の大忠勤王家と贈位祭祠せられ、東洋の一忠臣よと諸葛亮に比肩せられたる一巨人。彼れは南北朝大修羅場の舞臺に縱横活動して、紅焰萬丈の氣炎を吐きたる、

骨細き色黑き五尺男

の表面的動作なり、表面的動作なり。余は此楠河内判官贈正二位右近衞中將橘正成の表面を讀まざりし而して余が讀みし所のものは實に裏面の正成を讀みたるなり、文傑ユーゴー言へり、人間の顏面は假面に過ず眞の人は其假面の下に在るなりと、余が楠公を讀むと實に假面の下に存する眞の楠公を覘きしなり。

人は小宇宙なり、容易に解し難し、況んや楠公の如き巨物をや、故に暫らく爰に言はず、唯敎育者の眼光を以て其敎育主義を僅かに紹介せんとを欲するのみ。

人正成の特所を言ふもの、神變不思議の戰畧に非ずんば義勇の大將、勤王の忠臣を以てす、而して善良なる敎育者を以てする者少なし、余は正成が最も敎育の上に注意せしとを知る

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

なり彼の教育者ペスタロッヂが實物教育法の熱心者なりし如く、正成も實際的教育の方針を取れり、彼は最も迂濶なる空理空想の教授を避け唯務めて『今』と『實』との二字を以て子弟を誘導せり、

彼れが軍教の中に記して曰へらく

吾れ古を以て教へず、例を以ても語らず唯汝自ら心を以て心に傳へ、人事を以て人事を教ゆ、是れ悉く當世の人情風俗に應じ、今の天、今の時、今の國、今の事、今の兵、今の民、今の敵に向て直に用ひて安く、直に施して成し、直に戰ふて勝つべきの勝なりと

是れ彼れが諸家の兵書を研究して獲たる、活世應用の實行的學派にして、殆んど王陽明の徒に似たるものあり、曰く先づ自ら一心を明かにして敵情を察し、自國を正して敵國を窺ふ、吾陣を全うせば敵陣破ると、且や「兵を學ぶの法は心性を悟り、諸民を親愛するを上と爲す」と言へり、然り而して彼れは唯一の秘法として、殺伐亂暴の中に立て常に『愛』を以て教授したりしなり、

若し夫れ果して『愛』は嫉ます、誇らず、驕傲らず、非禮を行はず、己の利を求めず、輕々しく怒らず、人の惡を念はず、不義を喜ばず、眞理を喜び、凡そ事包み、凡そ事信じ、凡そ事望み、凡そ事忍ぶものありとせば、正成は悉く此方向に進みしなり、例へば家臣志貴某の輕擧して敗軍するや、正成は其過去の忠戰義勇を賛して其無事に遁れたるを悅び、己れが天命に違ひたるの結果なりとして其戰死の兵卒を悲みし如き、以て平常を知るに足るべし、殊に自ら天下無敵の法なりとして教ゆるものを見るに、

常に自ら詞を禁じ論談を爲す可らず、論談は敵を求む、己れの長を立んとせば必ず朋友嫉を起して讒を搆へ、過をたくむ、故に敵あるべし、又自ら出言して人を譏る可らず、常に人を譏ると多ければ殃日々長すべし、己れより下なる者は汝に對して論はずと雖ども心中憤り深し……此故に自ら詞を靜にして顏色を和げ、一切の事を他の問に隨て答ふべし、他人己れが長を容れば則ち可あり、用ひざれば寂ならしめよ、軍法に此術肝要なり、論を好む者には隨へ却て勝つべき利あり、嫉妬多き者には諫れ却て乘ずる利あり、皆此を以て成らば則ち人を用ると自在神通ありと、

是れ仁愛の大手腕を以て千將万卒を感泣せしめ、彼の千手觀言の如く、百足大王の如く、一頭の楠氏能く万億の手足を以て橫行濶步せし處世の眞法にして、又以て彼れが能く己れを責め己を硏究するに熱注せるとを見るべし、此に至て彼れは益々良敎育家たるを知る、何となれは敎育者の要は人々天賦の本性特所を暢長せしめ、苟も枉屈癈没せしむるとを恐る、

彼れは常に『人』に注意せり、

實に人を硏究せり、人を苟も輕視するとを爲さゞるなり、牛溲馬勃敗皷の皮も良醫は之を善用する如く、彼れは能痴呆の泣男を擧げたり、僞りの降將を善用せり、敗軍失望の將卒を喚起せしめたり。彼れは又談笑和樂の內に薰育し、威嚴整肅の中に風化せり、之れが必要として家屋を內外二ヶ所に設け、其外殿に出る時は主從最も威儀肅禮の風を整へ、其內殿に入る時は主從團欒して遊戲し、或は俗談に打解けて笑謔し、或は兵書を說き武藝を談じ或は圍碁將棊等に餘念なし、殊に遊戲中に家外競走の勝負を爲して自ら之れを共にし、水練、遠足、鬪武等は日々の課業の如くす、而して每夜道話文談を爲して苟且にも不德非道の談話を避けしむ、斯くの如くして楠氏校舍の氣風は一種特色を形作りて、純然たる敎育者の氣焰を放てり、彼れが校舍は乾燥原野の中に立て獨り燦然として甘樂の倶樂部を爲せり、湊川の原頭に、四條畷の屠殺場に、腕なく脚なくして戰ひ、喉笛を嚙碎きて死するが如き、最も凄絕なる猛士、最も大剛の武夫は、實に此花笑ひ禽囀るの樂園に養はれしなり。而して

其敎育の目的は

戰法を學びて敵を亡すとに非ざるなり、彼れ說て曰えり、當世奸者の流布せしむる軍法の如き、偏へに戰事を學びて敵を亡すとを巧みとし、曾て勝負の利ある所を知らず、凡そ勝事を好む者は利を貪ればなり、專ら利を貪れば必ず人親まず、人親まざれば陣中和せず、陣中和せざれば備必ず亂る云云と、然らば彼れが目的は何に向て進むか、乞ふ先づ彼れが卒業生の優劣順序を一考せよ、彼れ曰く、

第一、道德の士　第二、智謀の士　第三、耳目の士

第四、心强辨舌の士　第五、勇力正直の士

第六、用具巧達の士　第七、算勘撿見の士

而して此七將あれば戰はずして能く敵を亡すと言へり、要す

るに彼れが目的は超然として『道』の爲めに殉難殉國の士を養成するにありき、彼れが讀書の學問は皆經書にして唯道を敎ゆるにありき、彼れが武藝の修練は切瑳琢磨して專ら武道を講ずるにあり、彼れは又專ら神道を修め靜坐充息して道を鍛練せり、其妙術中の傳授に曰く

靜所に坐して心を臍下に置き、呼吸すると踵より上へ通ずる如くすべし(眞言を三返念ずるとを記す)此くの如く工夫すると或は百日或は半年にして道を得るを成就すべし、

嗚呼彼れは暗黑時代の勳爵士なり、額に汗して實行するの活敎育者なり、

道を講ずるの眞敎育者なりき、

余常にクロンウエルの鐵騎に比するもの實に楠氏部下の一團躰を擧ぐ、一つは靈光無形の天帝に因て道を行ひ、永遠の生命を以て天職に戰ひたり、故に主將死して各々平穩に解散し、靜かに人世を養ひたり、然るに一つは無形の道に信念を堅むと雖ども有形骸骨の主君を通して道を見るがゆへ、人間社會の眞心を全うして人職に戰ひたり、故に主將死して皆骸骨を紛粹し、強く人世を端睨せり、歸着する所異なりと雖ども、永遠不滅の活生命を道に因て印刻し、而して幾世の後常に人を復活せしむるは一なり、眞成の敎育長へに滅びず、今日敎育者の頭腦に靈動復活せしめよ、

嗚呼楠氏の裏面讀了して斯くの如し、而して尚此裏面を窺へば、那んぞ知らん更に愕くべき闃寂たる裏面ありて動かすものあり、此最奧なる裏面中の裏面にあるもの何ぞ、曰く賢明内助の楠令夫人是れなり矣。

文藝

其角雜吟三十七句

秘藏に墨をすらせて梅見かな。
たゝく時よき月みたり梅の門。
むかしかな初音三井寺ゆめの春。
ちくま河春行く水や鮫の髄。
春の夜や草津の鞭のゆめばかり。
河上は柳か梅か百千鳥。
西行の死出路を旅のはじめかな。
佛とはさくらの花に月夜かな。
おぼろとは松の黑さに月夜かな。
かげろふにねても動くや虎の耳。
蝶を嚙で子猫を舐るこゝろかな。

縑あらばこなたおもふや花の庭。
文はあさに櫻さしだす使かな。
饅頭で人をたづねる山ざくら。
白雪や花になりゆく顏は嵯峨。
はなざかり子であるかるゝ夫婦かな。
明星や櫻さだめぬ山かづら。
その彌生その二日ぞや山ざくら。
花に鐘そこのき給へ喧嘩買。
有明のおもておこすやほとゝぎす。
あかつきの反吐はさなりか郭公。
かきつばたたゝみへみづはこぼれても。
早乙女に足あらはるゝうれしさよ。
卯の花やいづれの御所の加茂詣。
さみだれやこゝにもそさを通る人。
菖こそ蛙のつらにあやめかな。
風ふかぬ森のしづくやかんこどり。
よめりせし時の枕か土用干。
西行と武藏坊には淸水かな。
芋の葉に命をつゝむ淸水かな。
たがために朝起晝寐夕すゞみ。
乞食かな天地を着たる夏衣。
夏瘦に能因しかも小食なり。
名月やたゝみのうへに松のかげ。
海棠の艀を悟れねはん像。
白川の關に見返れいかのぼり。
日の春をさすがに鶴のあゆみかな。

澤庵禪師を觀る

天知子

涙は目にのみ現はるものかわ、言葉は聲にのみ出るものかわ、極至の誠と極熱の情とは無現無聲の人たらしむるをもて、現はれぬ涙、聲なき言の葉こそ幽玄の大潮流を見るなれ、此幽玄の大潮流こそ神聖なる至愛に因て始めて完成す、至愛は人間の實躰なり。噫人間ほど趣味深く靈因高きものはなし、斯る宇宙の大靈粹を若し全身全力もて愛するを得ば其人は宇宙幸福の大家なるべし。幸福とは何ぞ、未だ愛の玄を悟らずして猥りに言ふ可くも非ず、固より樂の謂に非ず善の謂に非ず、此等は僅かに其一側面のみ、所在人世の苦も樂も美も醜も俗も聖も天使も惡魔も、「戀想」てふ大鎚もて打て一丸とする時、發作する火花こそ幸福とは言はめ。人は人を愛して始めて人の實躰を知るあれ、人を想ひ人に盡し、愛しに愛して之れが爲め死せば、いかに幸福なるらん、頬の肉は落るとも腕の骨は枯るゝとも、人を想ひ人に盡すの結果なりとせば其靈は肉づき其心は活き出でゝ、眞の道、眞の人となるを得べけれ、神聖なる戀想は極至の誠と極熱の情より成りたる犧牲獻

身の洗禮なり、去りながら「暗黒」てふ眼鏡をかけて人世を眺めたる人が、此洗禮を受けたる程愍れ悲しきはなし、彼れもし肉想の局小なる境遇に虜とならざりせば、彼れは非常に幸福の人なり、我れ屢々此幸と不幸の間に閑寂たる人を見る毎に胸迫ると幾度ぞ、月は雲がゝりたる所こそ興深けれ、宇宙の美は朧月夜に若くものなしといふこそ理りなり、冷悟せる道人の胸底烈々たる苦熱を窺ふ程人情悲惨の玄味を知るものなし、僧侶の形を以て隱遁したる厭世家に於て多く之れを見る。書を讀みて苦み多しと言ひけん如く人の情けを味ひて煩ひ多かり、この苦みと煩ひは發達の苦と煩にして、樂み自から其中に存す、「白水満る時雙鷺下り、緑槐高き所一蟬吟ず」、蘇氏の一句眞に大暗黒中の一燦光を描く、幸福の趣味至れるかな。

人を戀想して熱惑せしものを花風病者なりと言はゞ、其冷惑せしものは隱遁者なりと言ふべけれ、隱遁者は實に花風病者の冷罵冷狂せし氷結躰なり、俗世肉界の濁水を沈めて玲瓏たる人間の本心を示して結晶す、西行、長明、萱苅、兼好の徒に於て多く之れを見る、而して此頃また澤庵法師の墓に詣でて之れを見るとを得ぬ、

苔の清水に骨洒れて想ひを深く土に埋め、寂寞の相を眞如の月に行ひすまし、幾星霜の墳墓を圍く冷やかなる石に止むれども、そは形骸なる法師の假相のみ、東海寺の高僧澤庵禪師に物申さばやと、夏の夕べ墓に向ふて沈思すれば、世界の物音寂々と絶えて胸塞くも悲し、露草に虫の集鳴くも人を想ふ種子なり、せめては御身が苦しき熱き胸を、未知なれど吾が參らする同情の念にて慰め給えかしと、つぶやくも我れながら痛悲らし。

澤庵は大勇の士なりき、達悟の大僧なりき、其柳生但馬と屢々武の道を論ふて達道の極言を吐き、「不動智」てふ小冊紙を著して但馬を感動せしめぬ、固より禪學の修業より獲たる所多けれども、頗る武藝の道に詳しかりき、其人世を觀じて寂滅を期し、心を初めより死地に沒入して生死の界を脱し、多勢の勁敵悪鬼の中に端坐して形骸微塵に碎くるも一念動ずるとなく、造化万有を幻とし人世を泡沫とし、生の道を盡すをもて生に執着するなりとし、人に離れ世の煩を去らんとするは禪僧の鍛錬せんとする所なれ、澤庵は此道に向ふて苦し

くも深く鍛鍊しぬ、そも此鍛鍊の勇を刺戟せしもの何ぞ、そは吾が一滴の熱涙を彼れに濺がんとする所にありけり。澤庵を大勇大僧に爲したるものは、實に戀想の一刺戟にてありぬ、冷和恬淡の法師も木の片竹の端にはあらず、彼れは勉めて人を離れんとし想ひを忘れんと錬るも、生憎に緣因こそ深く、終に苦しき胸を花神に訴へて

かいまみし花の朝露わが袖に
をきかはしつゝ物思ふころ

壓ゆればいよ〳〵激し、消さんとせばなか〳〵に懐ひ苦し、ましてやうら哀しき秋の夕べには想も初めてし過つる年を數へて、吾れながら戀らで增しゆく情けを呆るゝこともありけん

古されて身にうき秋はつもれども
わが思ひ草色もかはらず

夢に見ると幾度ぞ、拂へども倘拂ひがたく、膚淋しき秋の夜に想ふてはなか〳〵に眠られず、別れて思へば其微笑さへ幻に見え、窓を排きて其人の行きたる天を眺むれば、あわれに月の閑なる寂寥に襲たれて瘠相の顏に一語を吐く

おきわかれ君がゆくえに有明の
月かたふきて鳴くばかりなり

意中の人は終に此眞情の涙や知らざりけん、淺猿くも心冷えしか、さえにても便りなきこそ何かと心艱むものなればや

わが戀は夢のうき橋うつゝにも
絕にし後はふみもこそ見ぬ

悲き一種の淋しさは誰れか知る、愛する人の爲し置きたる跡をつく〴〵見入るとは、其人の言葉を不圖思ひ起せし人ぞ知るらし、澤庵の意中の人は終に逝きしや、悲み言ふ可らざる口調をもて

あともなき人の言葉の何にかは
殘りてけふの涙とはなる

失愛の悲觀は勢ひ猛にすさまじ、多血多感の人は急流に筏を流す如く、剛毅勇膽の人は噴水を壓せんとするが如し、支えんとして愈々急下し、壓えんとして愈々激騰す、多感勇膽の此法師は、終に人も憂く世も物憂く、無限の悲みをもて悄々と獨り庵の中に臥す、されど未だ物憂く焦慮しくて

ひとり住む庵とはいはし夜な〳〵に
わが影そへて月もすむなり

人世の中に在て能く人世を遁るゝ所あるべきや、終に滿足の時なくてつくぐヽと吾身怪しとまで嘆くに至る

ひとゝせに花さく春はありなまし
草木にたにもあらぬ吾身は

彼れは煩悶鬱結の餘り、情を殺して涙を吞み、稍靈の世界に心を遁して、不完全ながらも冷やなる慰めを得たるやに思ひ定め、人世斯くこそと信じて無殘にも心を死地に投入し、形骸微塵に碎けよ心動ずるものかわと觀念して、心を人世に荒れぬきつゝ僅かに活氣をかへして歌ふらく

夢やぶれ心の月も光りそふ
雲の林にあかつきの鐘

彼れは兎に角此大苦境を越へて練る處甚だ深く、終に大勇士大禪師の人とはなりけれ、然らずば那で能く修道の武士たる但州の膽を寒からしむるを得べきや。しるべなきおきつの濱に鳴くたづの聲をあわれと神は聽かなん」雙びが岡の法師が此悲しげなる聲ぞ思ひやらるれ、孤明一色塵埃を脫盡すとまでは往きもこそしたれ、玉風春を喚んで華を銜み來り、金鷄曉を報じて天未だ明けず、とこそ言ふべけれ、澤庵法師の如き情け深き人間にして、情の世界に住める者いかで無情の獸たるべきや、其老ひて定に入るまで彼れは苦胸を抑えて僧侶社會の眞心に恥ち、無現無聲の（人情の世界に向ふて）人と成りて結晶せる涙を墓中にまで埋め去りしなれ、彼れが苦叫を僅かに天に訴えたり、そを聽くこそ同想の念一しほ深し、其聲は

しくるゝと見れば深山は月すみて
音のみくもる軒の松風

深き胸底ぞ知らるれ、其角が「棚經や聲の高きは弟子坊主」と冷笑ふたる如き、無現無聲の冷觀たる人に却て胸中烈火の燃る者多きを見る、

門しめてだまつて寐たる面白さ

此胸中誰か知る、人を愛するの眞人斯くこそありたけれ、更にこれに付句したるを見るぞ想高きを知らん、斯くこそ

桐の木高く月さゆるなり

天地管見

六合學人

（八）團結を固くするは何如ん

近頃ろ、吾が女生に右の問を與へたるに、左の如く答へたり。余が意を得たるもの多ければ、こゝに收む、

同志者の團結と云ふとに就ては、是まで單に想像のみにて、想像の時代には却て其考複雜なりしかど、此頃實際に之を見るの塲合に至りて、却て之を得る法の單一なるとを稍や發見せり、抑も同志者と云へる名よりして主義の異りたるもの其中に加はるなきは明なり。されど人は假令主義均しきとは云へ、之に達せんとする熱心の度異なるに隨ひ、均しきと云ふには差異なきも、名のみにして隨て其不熱心と云へる間隙に、種々の誤見、甚しきに至ては有るまじき私情さへ起り出づるとあり、又其初意見大同小異にして、互に間を確續せる所の德義心を以て、心意を腹臓なく吐露して能く團結するも、塲合に隨て其意見さへ異り來り、遂には主義到着に不熱の者より忌しき惡弊出來るものなり、故に同志者を團結せしめんとするには、能く其の謀る所の事物の實情を實地に熟知して、互に一の目的を標準として異見をおしむとなく吐露し、少しも私意を之に挾まず、而して尤も大切あるは、單に同主義を口にするよりも、其熱心の度を能く計りて團躰とすべし。弘く入るゝと云ふと必要なるべし、然し自由自治を唯一の目的とする國にも政府あり、種々の團結あり、同志者の團結てふものは、如何なる塲合に於ても、或は政府たるともあり、意見の是非を闘はすの團躰たるとあり、總て之が力を要するものなれば、之を爲すには弘く入れて際現なく、只漠として大同小異など云ふときは、遂に小同大異となるも、一日にても共に語らひたる處には、情實など起りて弊遂に甚しく力漸く失せ、善者も共に敗るに至らん。故に眞個同志者として進退を共にせんとせば、弘く入るゝと云ふとは却て害あり、二人にても確く結び、正義の旗を先立て進まば、遂に最後の戰勝者たるべし。

小説

夏草

無名氏譯

一回

作り易きものは情詩なりといへり、しかれどもまことの情詩は反て作りがたし。讀み易きものは情詩なりといへり、しかれどもまことの情詩は反て讀み難し。古人のこころをも知らずして、みだりにおのが褒貶を先にするは士人の恥づべき業にあらずや。

原詩は瀛西詩仙の作にして、ビナスといへる一女神がアドニスといへるものを慕ふさまを寫したり。ビナスは天性刁險にして、まことの戀の情をしらず。その口にせる戀なるものは、アドニスが戀にことなりて、姿いやしく風情なし。この一回にて見るときは、アドニスこそ戀を知らざるものに似たりけれ。しかれども渠がビナスの戀を御くるは、反てこれ眞正の戀を味ひ得たるものにして全篇の情事こゝに照應せり。ビナスは女神にしてその心は俗臭のかなたにさまよひ、アドニスは人にして反て超然たる靈風に逍遙す。かれは沐猴にして冠するのたぐひ、これは白蓮の俗泥を拔くにやたぐふべけむ。

讀者もし誤てこの篇をしりぞくることなくば、おそらくは戀の情に得ることあらむ。いでおろかなる筆の跡に古人の風雅をけがし侍らばや。

ゆかりの色の朝日影〳〵。寂しき空にぞ立ちのぼる〳〵。頃しも花のかんばせや紅深きアドニスは、千里の駒に鞭ちて、朝日の影をくる〳〵〳〵。狩こそ好める業なりけれ、戀は一生の禁物とかや。それと見るよりわはれやな、ビナスは思ひに身もやつれ、たゞ進みより〳〵、大膽ながら凝ての一念。喃物申さん、かくはいふ此身より、三層倍もうつくしい、野末に咲いた花の花、その花も御身のそばに置いたれば、物のくらべにならぬよな。エヽ何といふたらよかろいの。女神も其處を退いたがよい、世間の男も退いたがよい。白いといふならあの鳩よりも、紅いといふなら花よりも、まさるとも劣りない、御身を作ッた「ネーチユア」まで、さては世は御身

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

あッての命じやと申してゐるはいな。エヽ驚くまいもの。そこな乘たる駿馬をば早う下りてたべ〳〵。もしや早う下りたなら、一千度はおろかなことあの蜜のよな御禮をば、きッと御身にいたそうもの。こゝには毒蛇もいぬそうな、さアちやッとこゝへ來て早う座ッたがよいほどに、エヽ御身は「キッス」といふ字を御存じか。もう〳〵これで十分よ滿足よとは言はずして、盈つる下より朱唇の不足を覺ゆる程だにも、さては十度の「キッス」さへ一度のやうに短うて、また一度の「キッス」。さへ二十度ほど長うして、夏の日もまたゝく間と思ふほど、たのしき時を語り暮さんと、いふもビナスは一念力。アドニスが汗ばんだる手をしッかりと、とるや情の武者振ひ。思ひこんだる不亂の一心。エイ〳〵〳〵とアドニスが勢ひ破竹の駿馬をぞとゞめたりける。

右手には荒き汗馬の色手綱。左手にはわが戀人の〳〵そのアドニスの立ち姿。そのはぢろにて横向いて、いたくすねたる不懲の色は、戀てふものゝかたきかや。一人は燃ゆる火のごとく身は紅と化したるに、一人ははぢての上の紅よ、心は白き霜なりけり。

偖も戀の力はおそろしや、ビナスは臆む色もなく、駿馬を木株に結びつけ〳〵、これよりはわが戀人の心をも結ばなむエイ〳〵と、引くに引かるゝ優しのアドニス。ビナスが振の身を責めて、胸苦しさにこらへかね、言はんとすれば「キッス」にて、押へだてらるゝ毒朱唇。うたてやなアドニスは、紅顏いよ〳〵紅の、色さしみゆる無心の命。その紅の頰の火も、燃えんとすれば〳〵、ビナスの涙にうちけされ、靑息吐息嘆息と黃金の色の髮の毛に、うるさき迄もぬぐはるゝ。エヽたとへ女ぢやとて、そりや無禮でおらうぞへ。失禮といふものと、いはんとすればまたしても、ビナスの「キッス」に殺されて、たゞ言葉のみ口のうちにぞ殘りける。かの空寒うしてゑばに餓たる老鷹の、羽をむしり肉をくらひ骨をさき、羽ばたきして口箸の勞るゝまで〳〵食ふにいそぐ有樣や、ビナスがその戀人の、額や頰や腮までも、思ひのまゝに「キッス」して、何時を始とも畢とも、定めかねしにたぐふべし。

かくまでにビナスは慕ひこがるれど、隨ふべくも見えざるアドニス。胸の波はうちよせ〳〵、息のみ長くビナスの顏にかかりしに、エヽうれしやこは戀人の吐息よな。天のしめりか

靈の香か。わがこの頬の花白き園生でもしやあるならば、こうした匂ひの白雨に、さぞなしめるであらうものと、繰り返してぞ居たりける。

あはれよ、巣の絲にもつるゝは鳥あれど〳〵、これはビナスの花の腕に、動きもならぬアドニスが、塵一筋もまじりなきそのはづかしさと無念とに、怒りの眼いやまして、うつくしう〳〵、紅河に雨を加へては、秋の水とう〳〵〳〵堤を破るに異ならず。

いや〳〵〳〵ビナスは猶も戀の嘆願。その嘆願の巧手もの。その話の調子すら、一風變ッた風韻を、ゆかし〳〵と響かする。いや〳〵〳〵深默のアドニスは、猶も沈みに沈み勝。紅く見ゆるははぢての業か。白う見ゆるは怒ッてか。紅うてこそ床しけれ。白くてこそ床しけれ。たとへ如何樣にあらうとも、床し〳〵のビナスには、戀といふ字の其外に選ばむものはなかりけり。天上天下萬々年、その花の不死の手は、戀しき人の〳〵胸より離れまじ退くまじと、心に一枚の花起請。降りしきる〳〵心の雨も小休なく、頬のほとりはぬれまさりぬれては積る化の借錢。一度すゝしき「キッス」にて返して貰はんビナスの心。折しも少し腮もたげ、見るは優しの姿かな。かの水くゝり〳〵波間をちらと覗けども、人に見られてどんぶりと、すぐに再び水くゝり〳〵。その虫けらにさも似たる、アドニスこそはビナスより、花の「キッス」の催促に應へ兼〳〵、受けんとしては身を縮め、彼方此方へ朱唇を、反むくる樣やビナスには、三伏の金鐵も溶けなむ夏の日に、渇ける旅の人に似て、求めんとすれば得ざるこそ、身は水中にありながら、猶火に燃ゆるごとくなれ。エゝ聞えませぬ、御身の心は石かいな。たッた一度の所望じやに、その「キッス」が出來ぬとは、石でなうてなんとしやう。今更いふではなけれども、妾が御身を慕ふよに、妾も他に慕はれて、しかもおそろしくたくましい、戰の神であるぢやげな。その襟首は戰場でさげた例のないといふ、その行先のあらそひで負けたためしのないといふ、その神でさへ妾には、自由自儘の擒も同前。御身がいやじやといふものを欲しいといふてゝあッたよな。エゝようく聞いてたも。大事の鎗と兜さへ、みンな妾の靈机において、妾の爲とあらばこそ、踊りも踊れ、笛も吹け。笑もしたり上談も可婦しいこともいふてゝあッた。ナ

ンとゆかしの戀人エ、花の鎖にぐる〱としばれば鬼もわが擒。あの强情な金鐵もその力には一握り、そのよな神が妾には、言ふなり次第でないかいな。エ、慢心はやめさんせ。力自慢はやめさんせ。あの戰の神でさへ、隨ふといふものを、花の御身が勝ふとは、そりや無理よ〱。エ、そのうつくしい朱唇を、すこし妾にふれて見よ。この朱唇はそのように、うつくしうはないけれど、まだ紅うはござんする、御身の「キッス」は妾の「キッス」。エ、何をそのように、地ばかり眺めて御坐るやら。サアちッと上むいて、妾の眼瞳を御覽なされ、あれ〱そのうつくしい御身の頰が映ッて見えるでないかいな。

批評

まぼろし（湖處子著）　透谷

湖處子は清潔といふ題目に心を用ゆると比しく罪といふ題目を研究する事深しと覺ゆ。「空屋」に於てこれを見しが、まぼろしに於ても亦た之を見るなり。罪の報ひといふ事罪の闇きことなど湖處子に取りては心理學上の好問題の如くありと知らる。

有躰に言へば此著の奇巧を貪るに於て不自然に流れたり。四十前後の女姓が某知事の外妾となりたること、遊廓內の舞姬にヲフエリヤの出でたること管理者の不實の爲に堂々たる大學生が身を投げし事などは其顯著なるものと思はる。著者は戯曲家を以て自ら任ぜらるゝの事なれば多少のエキザゲレイシヨンは去るとながら此篇の如き幽凄なる題目を講せんとするには成るべく實際に近き事實を擧ざるべからず。

次に我心に留まりたるは、湖處子のキヤラクタース（作中の人物）は彼も此も意志の弱き者に作れてある事なり。大學生其第一なり、己は遊廓の不淨を慷慨して母に抗辨したる程のものが父祖の産業とは言ひながら他に財産もある身にて餘りと言へば安く生命を捐てたるものなり、內部の戰爭即ち罪の責苦にて自ら仆れたる阿國の如きは尙ほ恕すべし、この大學生は恐らく非大躰の弱志にてはあらざりしなるべし。五介といふ男も亦た極めて弱志の男なり、マクベスが其妻に動かされたる例もありと辨ぜらるゝかは知らねどもこの男の弱志は徹頭徹尾弱志者としてあらはされたるものにして、マクベスの如く惡意より善心に立還りたる時の靈妙の意味ある悔悟よ

りの弱志にあらず。阿國すらも弱志と見ゆるところ少なからず。この全一篇を貫ぬける大奸物すらも。

舞姬は作者が極めて意を凝めたるものなるべけれど、其無邪氣と高潔とはむしろ貴族などのものにして兎てもこの世の地獄なる遊里に生長すべき「美」ならず。其戀に狂ひし歌など、四五千年後の遊廓にあらざれば斯る高韻を聞くことなかるべし。別して戀愛の事には精はしと言はるゝ作者にして、斯の如き清淨無染の愛情が、肉情もなく申出もなく、長き間の交情もなき少女に然も遊廓內の舞姬に起るべしと思はれたるは少しく我國戀愛の歷史に對していかゞと疑はる。

然れども湖處子が銳意して外國の思想を輸入せんとすること心理學上の問題に心を潜むる事等は吾人の常に同子に服する所なり。唯だ吾人は湖處子が自家の特技に鑑みて自ら能とするところに進まれん事を欲むなり。この作の如き戲曲としては甚だ價直なかるべきも、罪といふ大題目に斯程まで深く入りたる功は沒すべからず。

〇千代田城大奧

永島今四郎、太田贇雄の兩氏が編述にて幕府大奧の景況を尤とも精細に寫し出せり。大奧の在樣を、當年の古老すら精はしくは知り得ず、たゞ宮女老婦が一生の專門として研究し暗誦し秘傳したるものなれば、固より今日の者ものが知る可き所にはあらず。然るに。今ま二氏の著によりて、之を洞察するを得ると如此く明けし、時代の一幸として文士の大ひに喜こぶ所ならん。其の朝野新聞紙上に分載せらるゝ時、本誌にて略評したるとあり、今ま一本に合せられて美はしく世に出でたるを觀迎せんとて更に一言を寄す。

〇日本大辭書

山田美妙齋、その詩才を藏めて此の乾燥なる大事業に從ふ、勞苦察すべし。されど、君を知るものは、皆な其の博言學の天才を知るべし。君が言文一致は、君が博言學の才によりて大ひに煥發したるものあるべし。此の人、今まや日本大辭書を編す。其緒言を讀むに、編著の意見も亦た秀づる所あり。本文は未だ精査せざるが故に、細評は后日に讓り、こゝに其第一卷の出版を祝す。

〇月露

月露は月一回、府下文海堂にて結ぶ。其第一點は、東瑚詩鈔なり。たゞ集めたる丈なれど、よう集まりたり、携ふるに便なる重寶小册子とす。

活ける基督と四福音　(警醒社發行)　山月子

博士デール氏の著にして、松尾音次郎氏の譯する所なり、全篇四章に分てり、論旨明白、以て疑惑を解き、信仰を立てしむべし。

〇安心立命　(南海堂發行)　同

「我は心柔和にして謙遜者なれば我軛を負ふて我に學べなんぢら心に平安を獲べし」といへる基督の言を題として、丁寧に安心立命の道を說く、讀者をして喜領せしむ。

〇婦人敎育雜誌　同

大坂友愛會より發兌せられし同雜誌は、主筆記者の病氣の爲め、去る六月休刊せり、吾人は記者の病早く癒へなんとを望む、

寄書

女神

明治女學校　原みね子

昔者東湖先生嘗て天地の正氣を歌ふて曰く凝ては百錬の鐵となり、發しては萬朶の櫻となると蓋し天地を包容し八空に磅礴するの正氣は、其一半乃ち武にして、他の一半は文なり、比馬拉の峯、大平の洋、其雄偉豪壯の形は、乃ち武の凝て成る所にして、其溫雅優麗の姿は、文の煥發したるものなり、巍々乎として、千秋に聳へ、暴風强雨、未だ嘗て、之を犯すこと能はざるは彼の武なり、白雪頂に冠して、夕陽麗かに、之に映ずるは、彼の文なり、其汪洋瀾漫、巨艦を浮べ、鯨鯢を跳らすは、彼れの武なり、其穩波千里、靜かに明月の姿を抱くは、彼れの文なり、豈唯山と水のみならん、雷轟き電閃きて、時に空際の積鬱を解き、花笑ひ、鳥歌ふて時に樂園の景を呈す、皆是れ宇宙の、文と武とにあらずや、而して、最も多く、武を受けたるもの、人に生れて男性となり、最も多く文を稟けたるもの、人に生れて女性となる、故に曰く、男性は武にして、女性は文なりと、

文武は共に、靈氣の半ばなり、其決して、相離れざることは、譬へば、磁石に兩極ありて、之を尺に分ち、寸に斷ち、又は厘毛の短きに切るも、常に兩極を有して毫も其作用を失ふことなきが如し、苟も靈氣を以て、天地の大をなせるものとすれば、如何なる、細微の者と雖、亦必ず文武兩極を具へ居ることを知らざる可らず、されば男子とても、素より文武の二つを有し、女子とても亦、文武の二つを具へざる可らず、天父、既に人に賜に文武の二つを以てし玉ふ、故、男子にも溫雅優麗の所あり、女子にも雄偉豪壯の所ある可し、然れども、大別するときは、男子は武に勇みて、女子は文に富めり、此故に、文の德の理想を抽象し、名けて女神と云ふ、

嗚呼女神よ、檐傾き、壁壞れたる、草の舍にも、爾一たび住めば實に、バビロンの宮殿よりも美しく見ゆるなり、其處には兄弟睦み合ひ、近隣閭里の人々樂んで入り、笑つて出るなり、不幸の内に圍まれ、否運の底に沈める者も、爾一たび手を握りて、神は君が上に在りと言へば、彼は失望より誘はれて、希望の光を認め落膽を回へして、勇邁の氣を鼓するなり、一塊のパンに飽き得ずして、衣履を敝ひ弊れたる、貧兒も、爾靜かに、其頭を撫して、君は、尤も多く天惠を得たるの人なりと言へば、彼は其、玉の如く淸き靈を保ちての貧賤は、人の城を屠りて、駟馬に鞭つよりも樂しきを感んずるなり、罪を犯して心に限り無き苦みを受けつゝある人も、爾靜かに其傍に立ち、改めよ、君は必ず救はれんと言へば、彼は忽ち羊の如く溫和となるなり、家とも言はず、國とも言はず、爾の至る所は、凡て春を催さずと言ふことなし、抑々爾は、如何にして、斯く迄に和氣を漲らし得るや、

或は云ふ、是れ爾の美なるが故なりと、然り、吾等は實に爾の美なるを見る、然れども、爾止まれば、物皆其美を生ド、爾去れば、物皆其美を失ふは何ぞや、吾嘗て不德の家門に入りぬ、其庭園に咲き匂へる百花、一も吾が眼に美しく、見へざりき、吾嘗て汚行の人を見たり、色は絹下の紅に似たるも、吾は毫しも美しく感ぜざりき、滔々たる世上の人、皆評して醜と云へる者も、善く爾を奉ドて、高潔熱愛の德を研けるときは、吾等の眼には、實に美しく見ゆるなり、喩へば淸夜中天の月の如し、自己既に秋毫の汚點なく、他物又來りて之を汚し得るものなく、而て麗かに發せる萬條の光線は、宇宙を照して、愛情淋漓たり、其外形の滿てると、缺けるとを問はず、吾等は實に、美麗の極なるを覺ゆ、然らば則ち、爾の眞美は、爾が高潔熱愛の德にぞある、

高潔の操、熱愛の情、二者合して眞美を成せるが如しと雖、更に一歩を進めて、詮し見れば、所謂高潔の操も亦、唯熱愛の情なるのみ、熱愛の情とは、己れの爲に求むる所なく、唯愛の爲に己を献ドて、他愛を行ふの謂と聽きぬ、己れの爲に求むる所なし、此故に外物來て之を誘惑汚染せず、高潔の根底、實に此に存するなり、而して己を献ドて愛を行ふが故に、如何なる艱難も、其進路を遮る能はず、磅礴として、八荒の隅に漲るなり、夫れ唯此愛を有す、故に中夜密室、獨り血涙を流して、憐れなるものゝ爲めに幸を祈るなり、

グレースダーリング孃、此熱愛の爲に、怒濤を蹴りて破船の人を救へり、夫人ヂスレーリ、此熱愛の爲に、車窗に指を傷つけつゝ、笑を保ちて、其人と樂しみ語りぬ、或は砲煙彈雨の中を横りて、傷に痛める、兵士の膿を吸るものあり、或は

縮べなき孤を集めて、其靈と肉とを麗はしく、發達せしむるものあり、慈善、教育、傳道、看病の途に於て、或は救ひ、或は慰め、或は教へ、或は勵ますなんど、凡そ女性の爲せる善行は、一として此の熱愛の情より、發せざるものなし、此故に、至る所に春を齊らして、一家、一國、及滿天下の、調和を來らするを得るなり、嗚呼爾、女神よ、吾今にして、爾を知れり、爾は即ち愛なるのみ、久しかりし哉、吾爾を求めしこと、家庭の教訓に於て、獨坐の沈思に於て、學校に於て、會堂に於て、日夜爾の爾たる所以を、探りつゝありしなり、而て吾今爾は、極めて畢純なる愛の或は凝結し、或は煥發するものなるとを認めたり、聞昔しサー、ロンフチール、靈鵰を探らんと欲して、厚き冑を澀ひ、强き馬に跨りて、豪然其家を出しが、途に聖主に逢て、慈善の大義は、唯同情を分つに在るとを示され、豁然として、醉の覺めたるが如くに悟り、余今にして、眞の靈鵰は、余が方寸の城内に在るを知れりとて、冑を壁に懸けよ、馬を厩に繫げと、叫びしとぞ、嗚呼吾亦、サー、ロンフラールの感なき能はず、神殿は築かけて、吾方寸の中に、立つ、願くは、長しなへに爾を止めて　熱愛の情を湛へ、以て天父の惠と、師父、朋友の、教へに酬ゆるを得んとを。

吾友を想ふ

すゞ子

人世の悲哀を説くものまづ死別を云ふ而して人の死別を悲しむものあれば慰めて曰く生別死別より悲しきもの幾倍ぞと眞とに然り我乃備さに之を知る思ふ昔し此境遇に出し時嘗て幼き胸の戶は破れんとはしたりける然れども當時思ひしは浮世の情實なる壓制者は譃し此處に至て其手を引かん一旦固結せる心結をも解き放すが如きは其權威の限りにあらざれはと若し夫れ眞の愛相互の間に全からずは否せめて我身だに替らざらは我は其人と共にある之終生其人の爲を計り終生其人を愛するを得んと此慰めこそ實に數石の泪夜な〳〵枕を漂はせ身前の森羅万象盡く之れ我に無情世界一人の我爲めに助け手なしと悟りはてゝ始めて天の一方に美人を望み優遲なる其恩惠の光りによりて温り得て餘りありける命の糧にてありける斯て思へらく生別いまだ以て悲愴極とするに足らず何となれば「別離」てふ文字の裏面には何物かありて存するを信ずれば之然らば如何ん曰く「會」の一字却て是れなり況んや志を異にし望を異にし等しき處僅に俗人の見得る處のみの故を以て一生の伴侶と賴み苦樂は物かは之と死をさへ偕にせざるを得ざるに於てをや更に況んや會者定離の通則はいたらぬくまなく其上にも働くに於てをや而して此苦楚を買はんが爲めには無論認得て今日迄其方向に進み來りし前途の希望も俄然抛て眼を他方に轉ぜざるを得ず生し立てゝ大神の大宮柱ともかなと朝夕に期望せしわが心の花の木も春にはあえど曲げ屈せざらんとするも難かるべし一身を擧げてすべて是れ甲斐もなき犧牲に備へざるべからざるか誰かかばかり苦き杯を飮みほすものぞしかも計らさりき實に計らざりきや我最愛最敬の友一朝驅られて此苦境に投ぜらるゝに至らんとは更に知らざりきけふの訣別あらんとは嗚呼友よ友よ知らざりき恨むらくは別れに臨んでフエーアウエルをだにいひ得ざりし事を憂を含んで彼女の校に歸りし時我身は實に授業の最中なりし硝窻を徹して不斗其容姿を認めしは哀れ神の許可を得てまた逢ふまでの思ひ出の種之けり業終て後直ちに其室を訪ひぬ然れども机邊靜かに讀書する人なかりしかば我は失望して歸りけり今より思へば時恰も帝都を辭するわが友の斷腸の落涙は上野山下の葉末に時ならぬ露と置重りし頃なりける時に至て始めて此事を聞くまでは眞に無苦無思なる我れにてあらざりしを嗚呼、山端の弦月古來幾多の人を惱殺し來つて深更悲しみに沈む孤客の上に凄然たる光をもらしつゝ覺えず絕叫せしめたり哀なる友よ今如何無情なる滊車は今やむしろ悲しみの園なるそのホームに常の如く彼女を喜ばしめんとて箭の如く飛び去りつゝあるか早晨枕に堪へ得ず起きて樓に上れば人籟猶靜かに神亦沈々共に愛せし軒ばの新樹心知ればか露滴々たり寥々たる曉星に對して歎つらく悲き人よ今朝如何に昨手交へ今日千里を行く慰めんと欲すれども雲關深く友情もらし難きを如何せん書して僅かに同情を表さんとすれども筆毛命を奉ぜざるを悲しむ試練の鉄鎚其上に直下せる我愛する友よ然れども安かるべし我荷も彼女か友たるの名を辱しむ安んぞ彼女の爲人を知らざらん我は信ず確乎たる彼女が信仰は今日迄幾干の荒派激濤を打破し來つて餘りあるを而して今回の事又彼女を苦しますに足らざるべきか切に恐らくは彼女が圍邊に唯一の慰め手勵まし手なく却て石を其首べに付けて出來得る丈け深く沈淪せしめんとするに似たる者專家皆然るを我等此際何をか爲ん深更天に接して彼女の爲めに熱禱する外豈一の術策あらんや然りと雖も神の攝理は深遠計るべからず此事若し聖意ならば我は彼女がヨブの忍びを忘れざらんとを望むセントオーカステンの母何人なるかを知らんことを祈る。

○書節婦阿栗碑後

峡中　公堂學人

我峡中有田中節婦婢、他縣人知之、本縣人往々有不知之者、吾於是乎、深有所感、推而知吾縣女德之衰也、夫阿栗一匹婦、不識教育爲何物、奉事于世人所嫌忌之惡疾良人、殆數十年、終始如一日、又營家事、厚養老母、旻天降殃、日川水漲、橋崩屋壞、村人倉皇荷擔而立、阿栗抱母、托諸知人、又將負良人而出焉、良人曰、余雖罹惡疾、爲汝全生命、今爲暴流而死、是幸也又天也、汝須速棄我而去、我決無遺憾、阿栗欷歔流涕不可、相共抱持、遂爲魚鱗之餌矣、其慘怛之狀、有不忍言者、豈可不悲乎哉、人或云、棄世而殉夫、是缺孝養、嗚呼阿栗不知養母者乎、夫婦人之大倫也、況忍人之難忍、而事良人、又養母、而周切懇到、莫所不至、當浩水汎濫之時、負母託知人、潑講以附之、其用意雖丈夫不能及、良人言不可、而相共死、是所以阿栗之爲節婦也、蓋扶母託人之義也、與夫同死之情也、世之爲教育家者、宜養如阿栗人品、矯世正風、併而欲使縣人知有節婦阿栗者也、余今夏游天目山、途次弔節婦之婢、深有所感、慨然執筆而書、

片々

●帝國女學校　今度日本橋區藥研堀町廿二番地に設立したる帝國女學校は、豊田剛橋、前川太郎氏等の創業に係るものにて、其目的は力めて時流の女子教育を避け、優美淑德なる日本婦人を養成するにある由、校長には金森通倫氏、教頭には小澤正太郎氏、内外の教員合して十數名、金森氏の夫人も亦教授の任に當らるゝといふ。

●米國大博覧會日本婦人會の設立　歐州に於る婦人の熱心に同會へ出品其他意匠を凝したる運動を爲すとは、隱れなき事なるが、本邦にても之が企圖に應じ、吾國婦人の古來世の公務を起し、或は家政を治むるの實況、又は繪畫著書の如き高尚のもの、又は裁縫機杼の如き手工の微妙、文房諸具の如き風雅韵致のもの等、何も我國粹として外に示して誇るに足るべきものを出品せんと、府下の貴婦人中協議經營中の處、恰もよしシカゴ博覧會事務局中の婦人委員總裁パーコー夫人より、本邦婦人も相當の出品あらんことを在京米公使を經て其筋へ懇請せしに、畏くも皇后陛下には之に先ち、既に我貴婦人中此企圖ある由聞し召され、特に右團躰へ出品資として御下賜金の御沙汰あり、愈々同會も成立したれば、米國大覧會日本婦人會と稱し、委員長には毛利公爵夫人承諾せられたるよし、又同會シカゴ府婦人舘内の一部を申受けて出品するとなれば、其交渉事務も直接に同婦人委員部と往復處理するものにして、臨時博覧會事務局とは別物なるは勿論、其出品物撰擇採集裝飾陳列等其他の事項に至るまで總べて同婦人會にて擔當處辨する由にて、事務は庶務調査出品三部に分てり、其各部委員の姓名は左の如し、

出品部委員

岩倉公爵夫人　蜂須賀侯爵夫人　鍋島侯爵夫人　樺山子爵夫人　三宮正四位夫人

戸田伯爵夫人　柳谷從五位夫人（補）

庶務部委員

伊藤伯爵夫人　大山伯爵夫人　後藤伯爵夫人　土方子爵夫人　陸奥從二位夫人

花房從三位夫人　瓜生從五位夫人（補）

調査部委員

前田侯爵夫人　松方伯爵夫人　榎木子爵夫人　高島子爵夫人　九鬼正三位夫人

林從四位夫人　高嶺從五位夫人（補）

書記

從七位加藤錦子　正八位武村千佐子

●女房の價十五錢　山口縣下阿武郡の某村にて、當時流行の紋紙と云へる者を催し、紋一を一錢五厘と定め、甲男は女房を賞品と爲せしに、乙男に當りしより泣く〳〵最愛の妻を引渡したりと云ふ。嗚呼是れ日本新聞に見ゆる所、吾人豈多言するに忍びんや、吾人は大に叫んで朝野の注意を喚起す。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

愛岐震災自助會の略況

在大垣　富田元資

(一)發　端

震災の狀況悲愴慘憺たるの當時　至仁至愛なる皇帝陛下は巨万の金を下賜せられて被害の人民は其鴻恩の優渥なるに感泣し又內外慈善家諸士の厚き贈物を受けて坐に感謝して止まさりし然るに金錢衣類に限りあれは數多の窮民をして無限の需要を得せしむるとは到底能ふべきとにあらす且つ徒らに施與の永きに失するは却て弊害を來らすると少からさるを知り志士は自づから其財嚢を解くに躊躇し仁人も亦其衣類を脫くに傾首するに至る之れ誠に當然のとたり然るに細民は未た取るべきの業あるにあらざれば依然さ路頭に立て救を號告すると頻りなり然りさ雖も金錢衣類の途稍塞がらんさするを如何にせん若し之れを反顧救恤するものなかりせば彼等は終に餓死するの外あらざるなり嗚呼惻隱の心あるもの豈之を坐視するに忍ひんや此に於て大坂青年會派出員宮崎利道在大垣天滿教會員磯野員爲の二氏深く感ずる所あり思へらく現時の急務は單に金錢物品を與ふるとにあらずして此の無告の窮民に善良なるの職業を授け自活自治の道を得せしむるとこそ實に震災地細民に施す無上の善後策なりさ確信し昨十一月二十日始めて數名の窮民を集め地方需要の竹籠を製造せしめたり是れ自助會の發端にして爾後　天父の祐護さ同感諸士の補助により漸次盛大に達しつゝあり。

(二)事　業

事業は竹籠を以て始め日を逐ひ竹を取扱に精熟せんさするに際し大阪實業熱心家なる馬場勝太郞氏來りて貿易提燈の製造に更めんとを勸め且同氏は自から其傳習の任を取り貧民の友さなりて全力を盡さんさせられたり此に於て同會は數十名の窮民を增加し只管其業の習煉を務めさせたり幸に　天父の祝福を玉ふ所さなりて僅か六ヶ月の經過を以て熟達の効を積み自活自治のものさなりしは此に十余名に至り尙暫くせば會員の過半は亦自活の位置に達すべし。

目下製造しあるの提燈は二万五千個余、既に賣却せしは五千個、今注文を受け居るもの五万余なり此提燈は地方に於て販路廣く未た一個も輸出せしとなし。

小兒には別に小籠(飯櫃の覆の類)を造らせ婦人の內に美濃縮なるものを織らせつつあり是れ亦需要者多くして製造せば必らず其人を自活せしむるに足る然れども現今資金に乏しければ器具を調ふると能はず故に空しく其業に熟せるものをも他の業を取らしめざるを得ず實に遺憾の至なり。

(三)會　員

同會は職に就かしむるの目的なれば無期限の施與をなす處にあらず故に豫め入會者に示して三ヶ月間衣食を給するの約をなし其間に於て自から業務に勉勵し四ヶ月目に至らば必らず自活自治のものたるとを期せしむ小兒は適當なる業を取らせて自活の精神を常に養はしむるさ共に傍ら肝要なる教育を施しつゝあれり。

現今の會員

男子	六名	內既に自活せるもの	二名
女子	廿一名	內同斷	九名
小兒	廿五名	內同斷	三名
總員	五十二名	內自活生	十四名

(四)救養金及資金

現今に至るの費用は震災當時の義捐金及び有志者の補助を以て維持したり今后さ雖ども尙義捐によりて之を維持せんさ欲す今また既に自活生出て來りたりさ雖ども又新に來るものあり是皆鰥寡孤獨無告の窮民なれば力の及ぶ限りは之を救はざるを得ず故は內外慈善家諸士の義捐を希ふものなり。

原料金は救養金さ自から別なるを以て同會の事業今暫らくの經驗を積み一のクリスチアン事業させらるゝの日に於ては株金を募り以て原料金即資本さなさんさす目下磯野氏は特に壹圓を資金の內に出し又本郡々長は慰勞金さして五圓を送られたり是れ亦資金の內へ加へたり。

(五)事　務

凡ての事務は宮崎氏擔當し他に二三の人其助けをなす每朝就業の前祈禱を以て神の祝福を乞ひ聖書に基て教話をなし自助の精神を養ひ夕べに感謝會を開き金員各々をして一日間の成蹟を報告なさしめ自然熟達勸勉の心を勵すの助けさなし居れり。

(六)地方人の贊助

同會の發達其速なるさ目的の適切なるさ凡てのと精神的なるさにより地方の人士をして感動せしめしと少からす現に同會のため非常の助けをなし居るもの其出で來れり當縣知事及本郡々長の如きは同會の提燈若し輸出するの運びに至らば滊車の運搬をなして無賃ならしめんさて鐵道局に照會せられたりし佛教の最も盛大なる土地に於て如此きクリスチアン事業の發達しつゝあるとは深き聖旨のある所にして將來必らず主の榮光赫々さ現はれ暗きさ死の陰にあるものをして永久の救に入らしめ給はんさのと信じて疑はざる所なり。

以上同會の略況を記して大方慈善家諸士に報し尙將來同會のため適當なる補助を與へられんとを希望す。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

毛のはへる香油

一名ふけしらず **美人かつら**

イヨー奇妙〱コンナ藥罐でサヘ毛がはへるから抜毛や薄毛杯は直に澤山毛がはへるに違ひナイ

此美人かづらは極々清浄なる植物油をうすめたるものに髪をこやし毛をはやす効能薬を加へたるものにして男女常に髪化粧に用ゆれば髪をこやし髪の發育を盛んにし髪の抜け落てはげる事なくしらが赤毛となる事なし又髪のうすきを厚くしほそきを太くしのぼせなどのうれいなくふけやできものなどを生ずる事なし又産前産後などに髪の抜け始めしときは少しも早く塗用すべし抜け毛を止め毛あしを速くする事妙也又既に抜け落たるあとなつほしできものやけどのあとなどに塗り附ればおのづからいつとあく毛のはへると眞實也

小瓶 金十錢
中瓶 金廿錢
大瓶 金卅錢

御遠方より御注文の節は郵便爲換又は郵便切手代用にて宜敷猶水物に付通運便にて御送可申候

發賣元つやふきん本舗
東京銀坐壹丁目（電話四百七十二番）
佐々木玄兵衛

日本第一等

おしろいいらず化粧用

小瓶十錢
大瓶廿錢

白妙は薄化粧の料さしてつやある美しき白色をあらはし白粉をぬり附たるがごさき氣味少しもなし
白妙は化粧下に用ゐて白粉の附き方よくむらにならず又あせをかきてもはげるとなし
白妙を用ゆればいかにあれ性の人にてもあれるとなくにきび○あせも○はたけ○すりむき○ひゞあかぎれ○しもやけなど直ちに治すべし
白妙は人躰のはだをやわらかにしてつやをよくし眞にふんびなるはだ合さなし色黒き人もしぜんに白色の美人さなるべし
白妙は少しの水にてさかし又は其まゝにて用ゆるもよし
白妙はもちまへの香氣によりてもろ〱の不淨を淸むべし
白妙は醫藥衞生の諸學理さあまたのためしさにもさづきワセリン○リスリン○ラノリン○白色顏料其他いろ〱のよき藥を以て製造したる無比の化粧料なれば從來世間にありふれたる化粧下や水白粉れり白粉さは大にきゝめあり
白妙は人躰に無害有効なるは勿論化粧下に用ひて日本白粉のおそる可きどくふせぎ前記の實効を有する事は近來がいこくの醫士學士等のドつけんせつさ又わがたび〱のためしさによりてしかさみさむる所なり乞ふおためしの上御ひようばんをたまへ

○元祖色白くなる三能しやぼん　一個　十錢
○髪のこやし毛のはへる香油一名美人かつら　大瓶卅錢　中瓶廿錢　小瓶十錢
○あれ性の御方は御必用玉子ぬか　一個　一錢五厘
○御おしろい下日にやけぬ水玉のはだ　一瓶　六錢

發賣本舗
銀座一丁目つやぶきん
佐々木玄兵衛
電話四百七十二番

便利地方大販賣所左に
大坂四ッ橋本林丁子堂 ― 函館末廣町新田太平
神戸元町精々藥館 ― 長崎本下町永福號

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學生夏期號外豫告

炎暑の折柄同盟各女學校の諸姉妹幸に恙なきや否や茲に硯を洗て半年の筆を納め或はなつかしき故山に向ひ或は明媚の山水に遊ばる、我社員も亦都を出でゝ或は村落の孤屋に書を友とし或は深山の古寺に幽玄の妙を探ぐるあり、而して來八月は例に依て休刊すべきなれど我社が諸子を想ふの情は之にして止むべきにあらず即ち特に夏期號外を發兊して遙かに清風緑陰のもとなる諸子の机邊にまいらせんとす、今社員が京を發するに先ち編輯机上にのこせし題目實に左の如し。

一休禪師　天知子
蘇東坡　禿木子
望夫石
英雄　山月子

其價値の如き必ずしも云はず、唯愛讀諸子が淸評をまたんのみ。但し價は普通本誌と同じ。

女學生編輯部

城南評論

第五號

廿一日發兊毎月一回一冊定價六錢　六冊前金卅三錢府外郵税一冊五厘

旗野櫻坪氏の俗歌韻話を評す……新井虎南
答客難……臥雲大夢
近世歌學評論（其四）……佐々木信綱
タトへ釋（下）……熊谷直人
惜寸暇文房主人の新躰和歌意見……ともしび（寄）
四絃秋……森槐南
楊笠湖の逸事……寧齋主人
德川時代女流の文振……永洲生
文界放談……竹文
臥雲餘錄……土屋大夢
奎星判……飯焚の翁
醫界慨言……東白翁

發行所　城南評論社
芝區神明町廿五番地に移轉

日本大辭書　山田美妙著

不要保證金　不徵豫約期

躰裁　大本　横六寸竪八寸　一頁一百〇五行　同字數二千
一百　一冊平均二百頁　全部一千二百頁　十二万六千行

全六冊外ニ附錄一冊（頁數百廿頁）

語數（全六冊分）七萬言（大槻氏ノ言海ハ全三万九千餘言）釋義（ノ各特殊ニアル物）十六萬言。引用出典及證例二萬一千種。

●第一冊ハ本年七月既ニ發兊セリ、第二冊ニ限リ八月廿日以後毎月十一日發兊十二月ニ至ッテ完成ノ事。附錄ハ十二月十一日發兊ノ第六卷ト同時ニ發兊ノ事。

●附錄目次、紙質及印刷見本、編纂始末、細則等ハ郵劵二錢領收ノ上進呈イタスベク候。

大辭書トシテ此無比廉價ノ物トスル爲ノ辛苦ハ實ニ豫想外ニアリ。其大要ハ編纂始末ニ述ブルト同時。著者ハ誓ッテ此辭書ニ關スル一切ノ責ハ殉ニ自カラ進ンデ任ジ、專心必ラズ完成セシムル事ヲ敢テコヽニ表白スル事。

東京神田區平永町九番地山田美妙方
日本大辭書發行所

本校ハ校舍完備土地高燥市街ノ雜沓ヲ避ケ眞ニ敎育ノ良地也本校ハ學科ノ程度ヲ低クシ之ヲ授クルニ老成ノ敎師ヲ以テシ務メテ應用ノ力ヲ養ハシム本校ハ次學年ヲ九月十一日ニ始メ各科共入學ヲ許ス志願者ハ八月中ニ願書ヲ出スベシ規則書ハ貳錢ヲ要ス

大阪東成郡淸堀村
私立浪華女學校

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

鈴木弘恭大人講述　附錄小倉てびき

第四版 百人一首講義

正價金廿八錢　郵稅四錢

御高評を得たる百人一首注文いよ〳〵多く第三版品切に成りたれば茲に第四版を印行し、且つ「小倉てびき」と云ふ、極めて便利の見出を添ゆ、之によりて百人一首それ〴〵の歌の句の在り處、意味、よみ手などを直ちに見出すとを得る至極重寶なり。

發兌元　東京麴町區下六番町六番地　女學雜誌社

女學雜誌大取次所

東京市本町三丁目　瑞穗屋卯三郎
同錦町二丁目　武藏屋藤藏
同尾張町二丁目　東海堂
同彌左衛門町　巖々堂
同表神保町　東京堂
同出雲町　警醒社
同鐵砲町　指金堂
同元富士町　盛春堂
同雉子町　團々社
福岡縣福岡　積善館支店

神奈川縣橫濱市　共同新聞發賣會社
同　同　万字堂
京都佛光寺烏丸　東枝律書店
同新町竹屋町　便利堂
大坂本町四丁目　岡島支店
同　福音社
神戸元町四丁目　福音社
函館市　福音社
熊本縣熊本　草野門平
京都新町二條　大黑屋書店

女學雜誌市內賣捌店

麴町區上六番町　日盛堂
同三番町　梅仙堂
同　同　福音舍
同飯田町　三文字屋
同　同　洗心堂
神田區神保町　松江堂
同　同　青柳堂
同雉子町　大塚書籍店
牛込區神樂町　積善堂
同　同　正導舍
同肴町　深田彌兵衛
本郷區弓町　文字堂
同　同　就本堂
同富士前町　解明堂
同　同　盛春堂
同二丁目　古河屋

下谷區東黑門町　三一堂
神田區松岡町　山口次郎
同旅籠町一丁目　榎本
同鍋町　清水嘉兵衛
日本橋區本町三丁目　庭花堂
芝區櫻田本郷町　鈴木新兵衛
同南佐久間町　栗原
同　同　鈴木
赤坂區新町　赤川市兵衛
同　同　飯田
京橋區尾張町　鈴々木
同出雲町　金盛堂
同　山田屋
本郷區天神町　吹進堂
神田區小川町　大塚雜誌店
同錦町二丁目　眞故堂

其他書籍繪双紙店に於而賣捌く

女學雜誌第三百二十號より改正仕り同號より白赤の二種に別ちたれば五月限り帳簿上も亦改正致度候間舊號迄の雜誌代金至急御拂込相成度候。爲替は麴町郵便局へ御振込被成下度候

女學雜誌社發送部

一新誌及び書籍代金二十錢未滿は郵劵代用不苦候、郵劵は五厘切手一割增の事

一雜誌及ひ書籍代金通運便にて御送付の向は屆け賃とも濟にして御送付相成度候

女學雜誌代價

○白赤双方合せ講讀の分

十册	前金　五十八錢	府外	六拾三錢
廿六册（半年）	同　一圓四十三錢	同	一圓五十六錢
五十二册（一年）	同　二圓六十錢	同	二圓八十六錢

○白赤の內一方講讀の分

六册	前金　三拾五錢	府外	三十八錢
十三册（半年）	同　七拾三錢	同	七十八錢
廿六册（一年）	同　一圓三十錢	同	一圓四十三錢
一册	金六錢	郵稅	金五厘

廣告料及無料廣告

一行（廿七字詰）	一回	前金拾錢
同	三回以上	一割引
同	六回以上	二割引

○十行以上一割引。　二十行以上二割引。

○四十行同四割引。

但し不道德なる廣告は謝絶す、慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く

○特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を揭くるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に右雜誌十部注文を要し以上半頁毎に十部增さ定む。

發行所　東京市麴町區下六番町六番地　女學雜誌社
編輯兼發行人　巖本善治
印刷人　堀口庄三

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY